

# 古文書のAMS<sup>14</sup>C年代

—年代既知の古文書五点と伝藤原行成古筆切の測定結果—

小田寛貴<sup>1)</sup>, 増田 孝<sup>2)</sup>

1) 名古屋大学年代測定総合研究センター

〒464-8602 名古屋市千種区不老町 TEL:052-789-2579, FAX:052-789-3092

2) 愛知文教大学

〒485-0802 愛知県小牧市大草年上坂 5969-3 TEL:0568-78-2211

我々はこれまで、加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) による<sup>14</sup>C年代測定が古文書の年代判定法としてもつ有効性と限界とを示すことを目的として、書跡史学の見地から年代を求めた古文書の<sup>14</sup>C年代測定を名古屋大学年代測定総合研究センターのタンデム加速器質量分析計を用いて行ってきた。現在までに測定した古文書資料は表1に示した18点である。こうした研究から、和紙は“old wood effect”による誤差(ずれ)が小さく、暦<sup>14</sup>C年代が歴史的年代と大きく異なるものではないことを明らかにしてきた。

これら18点の古文書のうち12点の資料(資料No.1-12)についての解説・歴史的年代・<sup>14</sup>C年代は、既に別稿において報告されている(小田・増田ほか, 2000; 小田・増田, 2001)。そこで本報では、今年度新たに測定を行った6点の資料について、その解説と<sup>14</sup>C年代測定の結果を報じるものとする。前年度までに測定を行った12点の資料に続き、資料番号を以下のようにNo.13~18とした。

表1. 歴史的年代既知の古文書資料

資料 No.	名称	歴史的年代
1	「十一面観音法」紙背書状	平安末~鎌倉初期
2	鎌倉時代紙背書状	鎌倉初期
3	右少弁吉田冬方奉御教書	文保二年(1318年)
4	某(近衛兼嗣?)書状	永徳元年(1380年)
5	徳大寺実時書状	嘉慶二年(1388年)
6	徹岫宗九安名	弘治元年(1555年)
7	春林宗俣安名	永禄五年(1562年)
8	宝叔宗珍安名	慶長二十年(1615年)
9	瑞竜寺仮名消息	1600-1672年
10	某(後口)書状	寛永九年(1632年)
11	葉室頼重書状	元禄二年(1689年)
12	口宣案	延宝九年(1681年)
13	本願寺光円書状	寛永十四年(1637年)
14	坊城俊方書状	貞享四年(1687年)
15	坊城俊方書状の包み紙	貞享四年(1687年)
16	起請文	建武三年(1336年)
17	和歌草稿	天正二年(1574年)
18	伝藤原行成筆古筆切	平安中~平安後期

以下に、資料 No. 13～18 の翻字と解説を述べる。

・資料 No. 13 本願寺光円書状

(翻字)

芳札本望之至候，殊花綾五端送候，誠御懇情之段令満足候，然は御継目無相違被仰付候由先以目出大慶存候壹岐守殿儀は此方之御事別而御念比二つき不相替万事頼入候，尚期後音之時候，恐々謹言，霜月二日 本門 光円（花押）松浦肥前守殿

(解説)

京都・西本願寺門跡の良如光円（1612～1662）が「松浦肥前守」に充てた手紙である。ただし、その書風などからあまり時代を下らないころの写し（楮紙）と判断される。本文書は寛永十四年（1637年）に松浦鎮信が父の跡を継ぎ、幕府からその裁許があったことについて述べたものである。そうした内容から、本願寺からの文書の写しを松浦家の側で取っておいたものと判断される。

・資料 No. 14 坊城俊方書状

(翻字)

従四位下昨夜勅許ニ候，仍此如ニ候状如件，三月一日（花押），  
（捺封）速水長門守殿，俊方

(解説)

江戸前期の公家である頭弁・坊城俊方（1662～1688 出奔）の手紙（楮紙）である。内容は北面の武士である速水長門守安益が、従四位下を勅許されたことの伝達に関するものである。この勅許は貞享四年（1687年）で、まさにこの時に書かれたものであるとみられる。

・資料 No. 15 坊城俊方書状（資料 No. 14）の包み紙

(翻字)

貞享四卯年二月廿九日安益朝臣従四位下勅許頭弁俊方ヨリ之状也

(解説)

資料 No. 14 の文書に付属する包み紙（楮紙）で、「貞享四卯年」と記されている。したがって、文書と同じ時期か、少し下る時期に文書を保管する目的で作られたと考えられるもの。

・資料 No. 16 起請文

(翻字)

宰相殿ノ所領事、いつくにかモタせ給て候らん、すへてしりまいらせ候ハす候、これ若しリナカラシラサルヨシ申候ハ、大仏八幡等ノ御罰ヲ八万四千タヒモ札コトニカフルヘク候、建武三年正月日

(解説)

通常の場合、起請文は牛王法印という宝珠を刷った料紙に書かれるが、これは白紙（楮よりは緻密な三桎様の光沢のあるもの）に書かれているため、その案文もしくは写しと考えられる。本文中に記されるように建武三年（1336年）の起請文と判断される。

・資料 No. 17 和歌草稿

(翻字)

常盤木を花にことハる世々の春 天正二八廿四暁夢想，天正二八廿四，公宴，御月次，霞中鶯，朝霧むせひなれにし谷の戸はかすみもはてぬうくひすの聲，かすめともかすまぬ聲や鶯のむすひなれにし峯の朝霧，吹とくハ風となりしを八重かすみひまあらハるゝうくひすの聲，濱菊，なひきふす風のはま荻ほに出てなみに浪そふ花のしら菊，慶賀，いくかへり満ぬる年のことふきを千世にやちよと君にかそへん，わか君にことふきそへて祈をかん満なん年の数を千とせに

(解説)

室町後期の公家の筆跡（筆者不詳）と判断されるもので、楮紙に書かれた和歌の草稿である。題は「霞内鶯」「濱菊」「慶賀」とあり、それぞれに1～3首が記され、さらに合点や加筆・削除が同じ手でなされている。端には「天正二八廿四公宴御月次」とあり、その時に詠まれた草稿とみられる。これはあくまで下書きで、自分用のメモである。書かれたのは天正二年（1574年）と判断される。

・資料 No. 18 伝藤原行成筆古筆切

(翻字)

先賢地底応驚魄後輩間曹定反唇，書懷上左右相閣下，燭暗数行吳氏涙夜深四面楚歌声，得項羽贈中納言，肥膚瓠白生陽武貞幹□青立□文，□張蒼

(解説)

白楽天のいわゆる「白氏詩卷」の断簡であり、藤原行成（971～1027年）の筆になるものと伝えられる。書風からおよそ平安後期のものと考えられている。料紙には「飛び雲」（藍色の繊維が漉き込まれている）という技法が用いられており、それが平安期特有のものであると見られることなどからも、この時代の書であることが推定される。

以上六点の古文書資料について<sup>14</sup>C年代測定を行った。化学処理についてはこれまでの報告に述べた手順と同様である（小田・増田ほか，2000）。<sup>14</sup>C年代測定には名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計2号機を用い，同一のグラフィットターゲットについて三回の年代測定を行った。測定された<sup>14</sup>C年代は較正曲線（Stuiver *et al.*，1998）に従って暦年代に換算した。<sup>14</sup>C年代と較正後の暦年代を表2に示した。

表2. <sup>14</sup>C年代測定結果

資料 No.	<sup>14</sup> C年代[BP]* <sup>1</sup>	暦 <sup>14</sup> C年代[cal AD]* <sup>2</sup>
13(1)	296± 28	1524( )1562, 1629(1638)1646
(2)	339± 30	1486(1519)1532, 1543(1592, 1623)1635
(3)	332± 39	1485(1522, 1578, 1626)1639
av.	322± 19	1518(1525)1534, 1537(1559)1595, 1621(1630)1637
14(1)	161± 35	1669(1678)1690, 1728(1742, 1750, 1757)1781, 1796(1804)1811, 1921(1936, 1947)1948
(2)	123± 32	1680(1692, 1727)1736, 1805(1812)1890, 1909(1920)1934, 1947(1949)1950
(3)	109± 37	1683(1701, 1722)1733, 1807(1815, 1831, 1880, 1915)1929, 1947(1949)1951
av.	131± 20	1681(1688)1700, 1723(1729)1735, 1806(1810)1814, 1832( )1879, 1915(1923)1932, 1947(1948)1949
15(1)	170± 32	1667(1676)1685, 1731(1764, 1769, 1775)1782, 1795(1802)1809, 1925(1939, 1946)1948
(2)	161± 39	1668(1679)1692, 1727(1741, 1751, 1757)1782, 1795(1804)1812, 1919(1936, 1947)1949
(3)	118± 37	1680(1694, 1726)1737, 1805(1813, 1850, 1863)1895, 1905(1918)1934, 1947(1949)1951
av.	150± 21	1676(1682)1689, 1728(1734)1765, 1766( )1776, 1802(1806)1811, 1921(1931)1939, 1946(1947)1948
16(1)	560± 31	1328( )1344, 1394(1403)1413
(2)	628± 37	1298(1304)1330, 1342(1366, 1385)1396
(3)	524± 37	1402(1414)1433
av.	570± 20	1328(1334, 1336)1344, 1394(1400)1407
17(1)	400± 31	1444(1468)1488
(2)	316± 39	1493(1528, 1552)1601, 1613(1633)1643
(3)	282± 37	1526( )1555, 1631(1642)1654
av.	332± 21	1494( )1505, 1506(1521)1530, 1546(1581)1600, 1613(1626)1635
18(1)	1071± 34	902( )916, 963(984)1002, 1012( )1016
(2)	1109± 36	893(902, 917, 962)984
(3)	1133± 36	887(896, 923, 940)978
av.	1104± 20	897(903, 916)922, 943(964, 972, 975)982

\*1) 三回の測定結果を(1)～(3)として示した。av. とあるのはこれらの平均値である。

\*2) 括弧内の数値は<sup>14</sup>C年代の中央値を較正した結果であり，  
括弧外の数値は<sup>14</sup>C年代の誤差の両限を較正した結果である。

<謝辞>

本研究の一部には、日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究（A）），課題番号：12780106，研究代表者：小田寛貴）を使用した。記して謝意を表します。

<参考文献>

小田寛貴，増田 孝，吉沢康和，藤田恵子，中村俊夫，古川路明（2000）加速器質量分析計による古文書および古経典の<sup>14</sup>C年代測定。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，XI，123-145。

小田寛貴，増田 孝（2001）古文書のAMS<sup>14</sup>C年代——近世の古文書と浄瑠璃寺阿弥陀如来像印仏の測定結果——。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，XII，63-71。

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Back, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plicht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon* 40(3), 1041-1083.

# Radiocarbon Ages of Ancient Japanese Documents

Oda, H.<sup>1)</sup> and Masuda, T.<sup>2)</sup>

- 1) Center for Chronological Research, Nagoya University, Nagoya 464-8602, Japan
- 2) Aichi Bunkyo University, Komaki, Aichi 485-0802, Japan

We have worked on radiocarbon dating of ancient Japanese documents whose written dates are clarified with the resolution of one or a few decades from the paleographic standpoint. Radiocarbon ages of 18 ancient Japanese documents were measured by Accelerator Mass Spectrometry (AMS). In the previous volumes of “Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University”, radiocarbon dating of twelve ancient documents is already reported with their historical information. This paper reports radiocarbon ages of five ancient documents and one paper fragment traditionally attributed to Fujiwara no Yukinari, which were measured in 2001 by using the 2nd Tandatron accelerator mass spectrometer at Nagoya University.